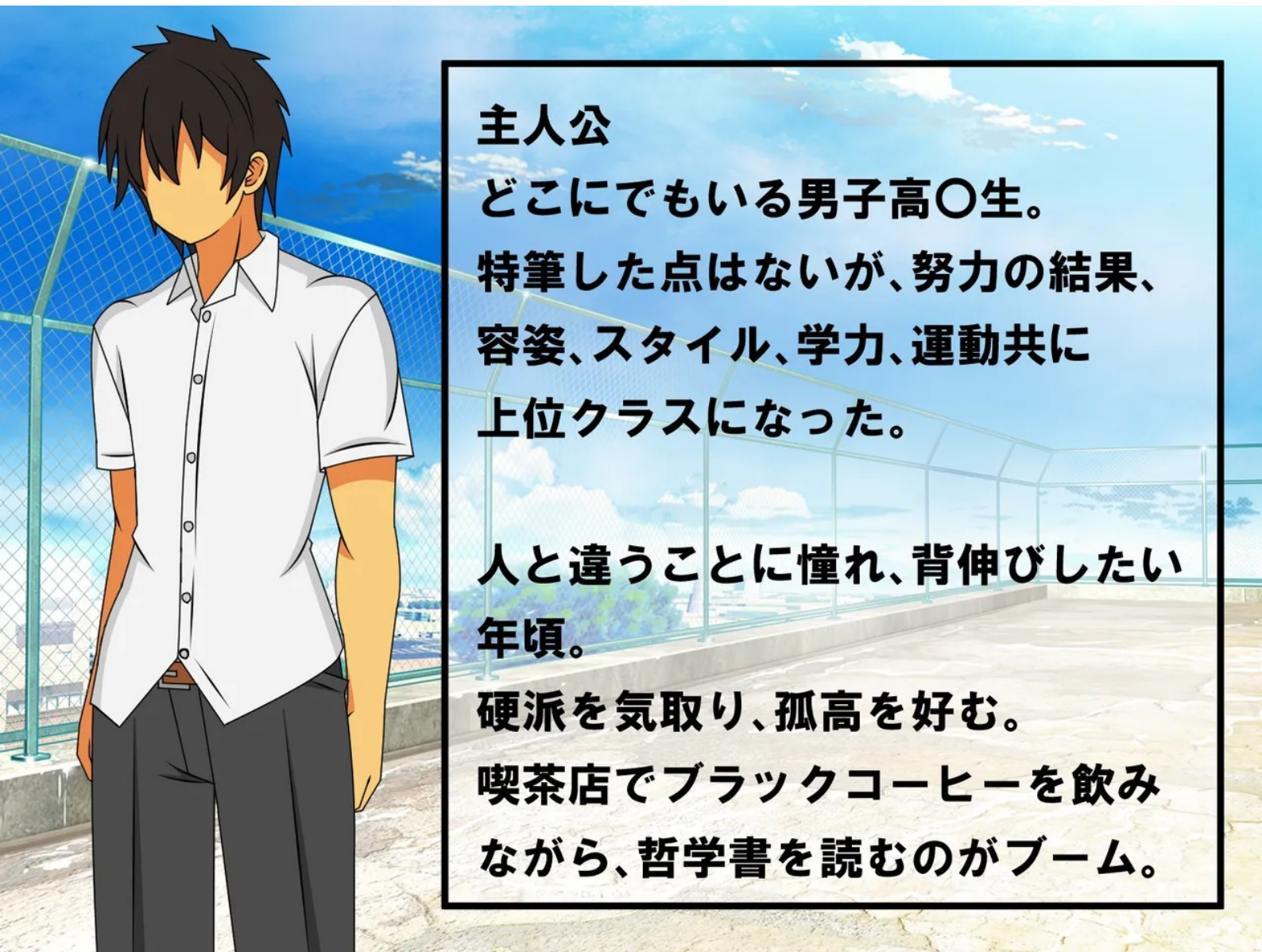


年上彼女が実はドSで
童貞がバレると射精管理



エッチ禁止のマゾ開発
童貞のままパパになる!?



主人公

どこにでもいる男子高〇生。
特筆した点はないが、努力の結果、
容姿、スタイル、学力、運動共に
上位クラスになった。

人と違うことに憧れ、背伸びしたい
年頃。

硬派を気に入り、孤高を好む。

喫茶店でブラックコーヒーを飲み
ながら、哲学書を読むのがブーム。

この頃の俺は、周りと違うことがカッコいい
と思っていた。

同時に同級生たちが幼く感じ、内心見下し
ながら、自分は孤高の存在に憧れた。

いわゆる中二病で、言動や行動を背伸びし
ただけだ。

まさに黒歴史だろう。

今日も路地裏にある喫茶店に来た。

コーヒーなんて違いがわからないし、砂糖
とミルクをたっぷり入れないと飲めない。

だけど、ここではブラックコーヒーを注文
する。

お金がないので、一杯で粘る。

古本屋で買った難しそうな哲学書を開く。

落ち着いた店内は流行ではなく、マスターが集めた本物であふれている。

ここに週一ぐらいで通い始めて、半年ほどが経った。

そろそろ俺も常連と言ってもいいだろう。

男たるもの、やはり馴染みの店の二件や二件は欲しいものだ。

運ばれてきたコーヒー。

まずは香りを楽しみ、一口飲む。

うん……とても深い味わいがある……

哲学書に目を落とし、文章を追う。

……眠気をコーヒーで飛ばすのは、非常に合理的なのではないだろうか？

「今日も難しそうな本読んでるね♪」

軽く会釈をする。

俺がこの喫茶店に通う理由の二つは彼女に会うためだ。

「ふむふむ……今日は近代哲学か……」

後ろから本をチラッと見ただけで、何の本なのかを当てられてしまう。

「この前は絵画の印象派に関する本だったよね。」

「いや、君は知的探求心が強いね♪」





ユミ 20歳

**大〇2年で、ここでアルバイト
をしている**

知識豊富で、主人公の憧れ。

**容姿もスタイルも良く、彼女
目当ての常連客も多い。**

**あまり自分のことを語らない
ため、謎が多い。**

主人公とは仲が良い。

ユミさんは俺が考える理想の大人だった。
知的でクールなミステリアスな女性。

この頃は歳が一つ二つ離れているだけで、
随分と大人びて見えた。

そんな人からお世辞でも褒められると気分
がいい。

「学校ではこの手の話題が話せる人がいな
いから、ユミさんとの会話は楽しいです」

「私も君みたいな若人と話せて、若返る気分
だよ♪」

今ではこんな世間話もするような間柄に
なれた。



「で、いつで君は『愛』ってなんだと思う?」

ユミさんは時々、このような答えのない質問をしてきた。

「『愛』の定義にもよりますが、人間が手にした感情の中で最も尊いモノの二つだと思います」

「……それって本当に君の答え?」

こんなこと言われたのは初めてだった。

「……すみません、本やネットの売りです。そんなに深く考えたことがないです」

「じゃあさ、今日は閉店まで『愛』について考えてみなよ」



「これ、私からのおごりね♪」

そう言っつて、新しいコーヒーとクッキーがテーブルに運ばれた。

普段と違う展開に驚きながらも、関係が進展したことに喜んでしまう。

気を取り直し、『愛』について考えてみる。さきほどの答えだつて、間違っているわけではないはずだ。

そもそもこの手の質問に絶対的な答えなんてあるはずがない。ユミさんが求めたのは『正しい答え』ではなく、『俺の答え』なんだ。

本を閉じて、考えてみる。

『愛』は尊く、素晴らしいモノだ。

それは間違っつていな……本当か？

俺が勝手に思い込んでいるだけじゃないの
だろうか？

こうなるとすべての前提が崩れる。
俺は今まで『愛』は無条件で素晴らしいモノ
だと考えていた。

だけど、もしそれが違うのだとしたら……
頭はこんがらがり、うまく言葉にできない。
だけど、物凄く興奮していた。

今まで信じて疑ってこなかったことが、こ
れほど簡単に覆ってしまうものなのか？

カバンからノートとペンを取り出し、頭に
浮かんだ考えを書いていく。

点と点が線になり、徐々にぼんやりと輪郭
ができていく。

できたっ！と思えば、また違う考えが浮か
び、最初からやり直し。

気が付けば、客は俺だけになっており、閉店
時間を過ぎていた。

「すごい集中力だったね」

「す、すみません！」

「すぐに帰るんでっ！」

「大丈夫、大丈夫。」

「マスターには私の方から事情を説明してあるから」



「片付けをするマスターと目が合い、大丈夫だと言われる。」

「それよりも答えは出た？」

「一応、自分なりの答えは出たんですけど、本当にこれでいいのかわからなくて……」

「最初は疑いもなく、『愛』って素晴らしいモノだと思ってました」

ユミさんは何も言わない。

「でも、途中からわからなくなっ……
今でもグルグル頭の中でいろいろな考えが
回って、言語化できないんですけど……」

結論から言うと『愛』に答えがありません。
人それぞれ千差万別で、絶対的なモノではな
く簡単に変化する。

なのに、世間一般では『愛』は素晴らしいと
考えられる……いや、洗脳されている。

『愛』は常識が作った『幻想』であり、『愛』が
美しくなければいけないのは『呪い』だと思い
ました」

粗削りで、反論の余地ばかりの結論だが、自
分なりに納得した答えが出せた気がした。

「『愛』は素晴らしく、美しく、尊いモノでな
くていいの？」

「その通りです。」

ただし、今はどう思っているだけで、すべて考えが変わるかもしれませんが。

でも、それでいいんだと思います。

人は生きていく限り、考えが変わる。

言葉に捕らわれるのではなく、自分で意味を見出すことが大切だと感じました」

「最初に聞いた答えは、何のひねりもないつまらない模範解答だったけど、今のはなかなか面白かったよ。」

まあ、答えが人それぞれってのは無難な回答だけど、私は好きだよ♪

……いつか君の新しい答えが出たら、教えて欲しいな。」

お世辞かもしれないが、憧れの人に褒められることで、高揚感に包まれていた。

「そんな君にフレンチセント♥」

「なんですか、これ？」

渡されたのは、中身が見えないプラスチックスの小さな箱だった。

「危ないモノじゃないから安心して。」

でも、中身は家で二人のタイミングで見ることを推奨するよ」



「もしかしたら、君は私が探し求めていた人なのかもしれない。」

いらなければ破棄していいからね。」

探し求めていたって……期待していいんですか！

中身を確認したくて、急いで帰って来た。

帰る途中、たくさんのことが頭に浮かんだ。

ユミさんが俺のために用意したプレゼント
って一体なんだろう？

もしかして、ユミさんも俺のこと気に入っ
てくれてるのかな？

帰りが遅かったことを心配する両親。
適当に言い訳して、部屋に入り鍵をかけた。

一人で確認って、もしかしてエッチなやつ
とか？

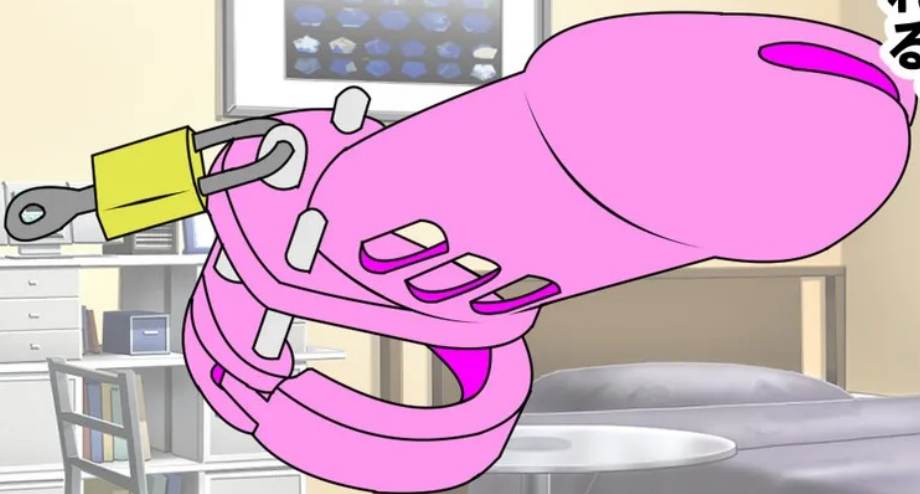
不安よりも期待が上回り、いよいよプラス
チックの箱を開けた。

「……なんだこれ？」

同梱してある説明書を読む。

・貞操帯(ていそうたい)
もともとは装着者の貞操を守り、浮気を防
止するための器具。

近年ではSMプレイで性交や自慰を防ぐた
めに使用される。



「これが俺へのプレゼントだったんだよ。」

わけがわからなかった。

その後もネットで『貞操帯』について調べた
が、出てくる内容は同じようなものばかり。

今回、俺がもらったものは男用の貞操帯だ
から、俺がつけるのだろう……

マヅ男が射精管理をさせられている記事を
読んでいるが、現実味がない。

貞操帯なんて初めて知ったし、俺はどちら
かと言えば、MよりSだと思う。

「間違えてっつてこないよな……」
ユミさんがくれた物だから、簡単に捨てる
わけにもいかないし……」

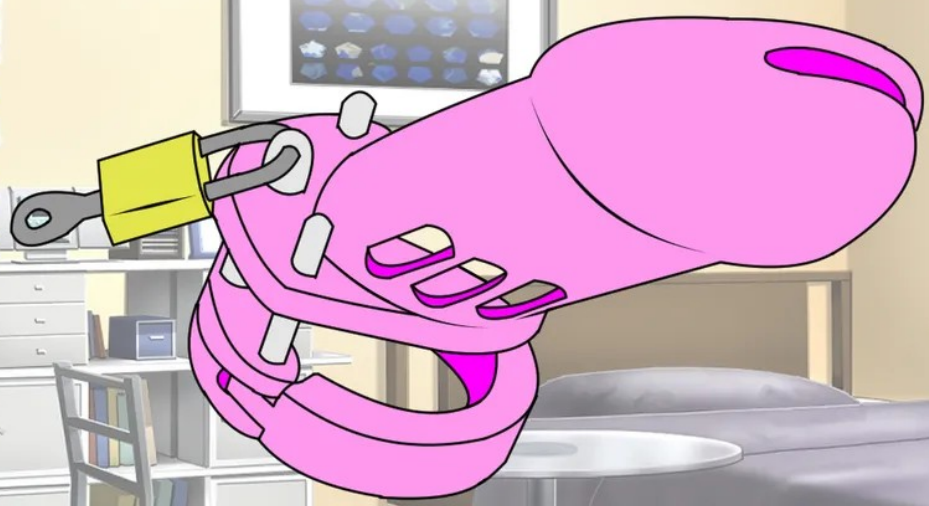
同時に今日の出来事を思い出す。

『愛』について、最初と最後では考え方が変
わった。

もしかしたら、俺は先入観だけで判断して
いるのかも知れない。

否定することは簡単だ。
もし、合わなかったら、外せば良いだけだ。

貞操帯の作りも確認し、ネットで知識も得
て、実際につけてみることに決めた。



「何事も経験だからな」

自分に言い聞かせるようにつぶやく。
決して自分はマゾ男などではない。

説明書を読む限り、簡単に取り付けられる
と思ったが、意外と難しい。

最初に金玉にリングをつけるが、これがな
かなかハマらない。

ようやくハマったと思えば、今度は竿がう
まく収まらず、陰毛も絡む。

悪戦苦闘しながら、何とか装着することが
できた。

「う、これでいいのかな？
あっ！ 最後は鍵をかけないと……」

小さな南京錠で鍵をかけた瞬間、なんとも
説明しがたい感情が襲って来た。

勃起してしまうかと心配していたが、貞操
帯をつけて、鍵をかけた瞬間から、俺の身体は
勃起を拒絶したのだ。

もちろん、多少は大きくなることはある。

しかし、すぐに痛みが伴い、身体が勃起を拒否するのだ。

まるで身体が「勃起しても無駄」だと理解しているかのようだった。


もし、このまま貞操帯を付け続けたら、勃起できなくなってしまうのでは？

先ほど、ネットで読んだ貞操帯を付け続けた結果、ペニスが退化する記事を思い出す。

怖くなって、慌ててすぐに貞操帯を外すと、相棒はいつものように、あっという間に硬く勃起した。

結局、その日はそれ以上貞操帯をつけることはせず、日課のオナニーをして眠りにつく。

同時に貞操帯を付けた時の不思議な感覚が脳と身体に残っていた。



朝起きて、学校へ行く。
授業を受けて、友達と話す。
いつもと変わらない日常のはずだった。

だけど、俺の心はここになかった。

早く帰りたい。

早く帰って、貞操帯をまた付けたい。

この感情が何なのかわからない。

どうしてユミさんは俺に貞操帯をくれたのかわからない。

だけど、確かなことは俺が貞操帯に惹かれて
いる事実だけだ。

もともとマゾの素質があったのか、興味本
位で一時的な気の迷いなのかわからない。

それを確かめるために、もう一度貞操帯を
付けなくてはならない。

学校が終わると、すぐに家に帰った。

部屋に入り、カーテンを閉め、鍵をかける。
すぐに全裸になり、鏡に映る自分を見る。
イケメンではないが、整った顔。

帰宅部だが、筋トレやジョギングで鍛えられた身体。



ペニスだって平均より大きいし、皮もズル
剥けて亀頭もしっかり成長している。

まだ童貞だが、彼女ができたら、満足させられる自信がある。

そんなことを考えながら、貞操帯を付けた。

昨日よりも無理なく付けることができた。
安堵したのも束の間、勃起できないにもか
かわらず、性欲は健在のようだ。

しかし、性欲を解消しようにも、ペニスが触
れないため、射精することができない。

……いや、違う。

わかっていて、気付かない振りをしていた。

ペニス以外の性感帯が敏感になっていた。

勃起できないペニスの代わりに、性欲を満
たそうと身体が変化したのだろうか？



「ドクドク〜」

俺のセックススズンですか？」

「すごいよ♥

君、本当に初めて？

これまでで一番大きくて、一番上手だよ♪
もっと激しく責めて〜！」

「今日ほやほやんやりますから〜！」

「え〜、このままじゃ、私壊れちゃうよ♥

でも、君なら限界まで頑張っちゃうから
もっと気持ちよくなせてね♥

「ほらほら、もっと気持ちよくなせてね〜」



いつものようにユミさんとのセックスを妄想する。

違いはペニスには一切触れずに、普段は触れない乳首とアナルを弄ること。

ペニスに意識は向かず、いつもは感じない場所が敏感になり、性的欲求を満たす。



信じられないかもしれないが、身も心もペニスが前提になっている。

新しい扉が開いた瞬間だった。

……いや、もともと開きかけていた扉を見

栄や世間体などつまらない常識で閉めていただけかもしれない。

思えば、俺は人と違うことがカッコいいと思
い、憧れていた。
だけど、それが間違っていたのだ。

本当にカッコいいのは自分があること。

それは周りや常識に流されず、自分で考え
経験し、蓄積していかなくてはいけない。

そのことをユミさんから教えてもらった。

結局、俺は今まで自分で考えてこなかった
のだ。

本やテレビの受け売りを自分の考えのよう
に語って、満足しているガキだったのだ。



貞操帯は俺にピッタリのプレゼントだ。

常識で凝り固まった自分に変化を与えてくれた。

これから自分で考え、常識を疑い、自分の信念を持つとう。



そう……これは確認作業だ。

乳首やアナルがチンポよりも気持ちがいい確認なんだ。

決してやましいことではなく、人体の探求心なんだ。

もう一回確かめよう……

あの日から一週間が経った。

俺はいつものように喫茶店の前にいた。

股間には貞操帯を付けている。

ユミさんは何て言うだろうか？

俺はユミさんが探し求めていた男になれるだろうか？

この一週間、様々な思いが頭をよぎった。

もしかしたら、すべて冗談で、俺が真に受けてしまっただけなのではないかと不安にもなった。

これほど不安で、楽しくて、ドキドキしたのは初めての経験だ。

この感情が『愛』なのかわからない。

どんな展開、結末になろうと、俺は今の自分が好きだ。

「あっ！来た来たっ！
待ってたよぉ〜♡」

その笑顔を見ただけで、すべてがどうしても良くなる。

俺、やっぱり、この人が好きだ。
マスターに会釈をして、カフェオレを注文する。

「あれっ？今日はコーヒーじゃないの？」

「実は俺、苦いの苦手なんです」

「苦い顔して、我慢して飲んでたもんね」

バレバレだった。

「それで、「アレ」どうだった？」

「……良かったです」

「やっぱいいねえ〜♪」

君みたいなタイプは絶対ハマると思ったんだよねえ〜WWW」

顔が真っ赤になり、熱くなるのがわかる。

「い、今も付けてます……」

「おいおい、将来有望過ぎるだろう〜WWW」

「そ、それで、俺……ユミさんの探し求めていた人になれますか?」

「えっ?」

「俺……ユミさんが好きです」

ここまで言うつもりはなかったが、気が付けば口からこぼれていた。

「……ありがとうね。」

期待させるような私の言い方が悪かったよね……

「気持ちは物凄く嬉しいんだ」

「……俺の方こそ先走ってごめんなさい。」

やっぱり、俺なんかじゃ、ユミさんとは不釣り合いですよ……」

「ん〜、君が悪いんじゃないかって、私の方に原因があるんだよねえ〜」

気を使われている自分が惨めに感じる。

「本当に私の個人的な理由だよ。」

あと二時間ぐらいで休憩だから、その時、詳しく話していい？」

ユミさんは何でもお見通しのようにだ。



「ごめんね、お待たせしちゃって」

「大丈夫ですよ」

全然大丈夫じゃなかった。

俺が先走り過ぎたせいで、結果として、ユミさんに迷惑をかけてしまった。

何も言わなければ、今の関係が続けられたのに……

「君はさ、私に幻想を抱いているんだよ。」

「素敵な年上のお姉さんって感じでしょ？」

その通りだった。

「私からすれば、君の方こそ素敵な男性。」

だから、私のようないきなり貞操帯を渡すような変な女とは付き合わない方がいいよ」



「君の前ではカッコいいお姉さんを演じていたけど、実際はダメダメwww

弱いし、我儘だし、独占欲が強いし、束縛もしちゃうし……」

「……すればいいじゃないですか」

「えっ?」

「バレバレですけど、俺だってユミさんの前ではカッコつけてはっきりしていましたよ。

これからはお互い、本当の姿で会えませんか?

それでダメなら完全に諦めます!
俺、やっぱり、ユミさんが好きです!」

「ふん、君って意外と熱いんだね♪」

「それじゃあ、お互い素の自分をさらけ出すってことでいいんだよね？」

「はいっ！ それでダメなら諦めます」

「君が先に音を上げるかもしれないよ？」

「だ、確かに……」

「まあ、そこは「頑張ります」でいいよ？」

「貞操帯は大丈夫だったから次のステップに進むよ。」

「とりあえず、乳首やアナル開発をしてもらおうかなWWW」

「じ、実はもう弄ってます……」



「えっ？ ちよっと本当に？」

「うわあ、想像よりも適正あり過ぎでしょ。」

「す、すみません……」

「確認だけど、今なら普通に帰る事ができるよ？」

「このまま進んだら、もう後戻りはできなくなるかもしれないよ？」

「気付いているだろうけど、私って性癖ねじ曲がっているからね。」

「私と付き合つと、普通のカップルがするよ
うな肉体関係は諦めてもらうけどいいの？」

「実はあの後も、『愛』について考えていた
んですよ」



「えっ？ そ、そうなんだ」

「『愛』と『友情』の違いってなんだろぅなっ
てずっと考えていたんです。」

俺の中では相手が道を踏み外そうとした時
に、連れ戻すのが『友情』で、共に踏み外すのが
『愛』だと思いました」



「だから、仮にユミさんと付き合う先が破滅
であったとしても構いません。」

地獄に墮ちるなら一緒に墮ちましょぅよ」

「フハハッWWW」

地獄はひどいなあ〜……ん〜でもある意
味地獄かもしれないな。」

君になら本当の姿を見せられるかも♪」

こうして当初想像もしなかったが、俺はユミさんと恋人(仮)になった。

仮なのはユミさんからの提案だ。

本当に嫌になったら、別れていい。

その際に足かせにならないように、俺が高○を卒業するまでは仮交際になった。

当面はお互いを理解し合うために、デートをすることに決まった。

自分でも順番が逆で、先走り過ぎたと思うが、この直観は間違っていないと思う。

磁石のN極とS極が惹かれ合うように、俺たちはお互いに惹かれたのだろう。

本格的な関係はまだ先だが、すでにユミさんからは、様々な指令を受けていた。

安全面と日常生活を考慮して、鍵は管理されていらないが、オナニーをする時は許可が必要になった。

さらにテレビ通話で、ユミさんが見ている前でオナニーをしなくてはならない。

もちろん、チンポは触ってはいけない。

陰毛は剃らされ、ツルツルのパイパン。

貞操帯もワンサイズ小さいモノに替えさせられた。

最近では、乳首とアナルを弄れば、簡単に射精できるようになった。



「パイパンにして正解だったね♪
今は判っているけど、将来的には永久脱毛
したいよねえ〜WWW

淫紋タトゥー彫るのも可愛くない？

今の貞操帯も馴染んできたようだから、も
うワンサイズ下げてみようか？」



画面越しのユミさんが楽しそうに話す。

「お、おほっ♡

ぞ、そろそろ、イッても良いでしょうか？」

射精だって許可制だ。

何度も何度も寸止めをして、貞操帯から我
慢汁が垂れ流れている。

「あゝ、もうこんな時間か……
残念だけど、そろそろイ力ないと、日常生活
に支障が出ちゃうもんね」

俺もできることなら、何時間でも、何日でも
ユミさんの期待に答えたい。

だけど、二人で決めたルールで、高〇を卒業
するまでは無理はしない。



「じゃ、じゃあ、イキますね……」

乳首とアナルを弄る力を強め、射精の準備
をする。

射精する時は画面越しではあるが、お互い
の目を見てするのが決まりだった。

（ユミさん、もっと見下すように見て……）



興奮しちゃったわー！
可愛い♡
W
W
W

可愛い♡

オ、最後じゃあー！

スーパーストリーム！

メンメン

ビュッ
ビュッ
ビュッ

ビュッ

「詳しくは知らないけど、今どきネットでエッチな動画たくさんあるんじゃない？」

「グラビアアイドルだって、きわどい水着だし、パンツぐらいで興奮するって。『ユア過ぎない？』」

「しかも、これ、普段着の安物だよWWW」



「なんかいつもよりたくさん出てない？」

「いつもは貞操帯から淫が出るようなお漏らし射精なのに、今日はやけに勢い良くて、量もヤバイじゃんWWW」

「君はそんなにおぼんつが好きなの？」

「ユミさんだからです！
俺、前まで実はオナニーのやり過ぎで遅漏
気味だったんです。」

でも、ユミさんをオカズにするど、すべイッ
ちゃって……」

「ええ、本当かな？」

じゃあ、私の裸見たら、それだけで……」

フ。ジュッ♥

「ちょっとヤダァ、追加射精？」

私の裸想像して、イッチャったの？」

「す、すみません……」

「まあ、しょうがないなあ♥

今日はこれで終わりだから、ちゃんとキ
イに掃除してから寝なさいよ」

ユミさんとの交際(仮)は順調だった。周りから見たら歪な関係かもしれないが、これが俺たちの『愛』だった。

セックスはまだしたことがないが、いつかできる日も来るだろう。

普通のデートでも楽しいし、ユミさんと一緒にいられることが何よりの幸せだ。

高〇三年になり、あと半年で卒業。

大〇も推薦でほぼ決まり、地元近くで一人暮らしをする予定だ。

そうすれば、ついに正式にお付き合いができる。

時計を見ると約束の時間が近づいていた。

俺は席を立ち、教室から出ていく。

屋上へ行くと、クラスでも仲の良い女友達がいる。

彼女は少し変わっていて、中二病の俺と気が合ったのだ。

「○○さ……私と付き合わない？」

想像していた展開の一つだった。



「なんかさ、周りの奴ってどいつもガキ臭くて、正直会話が成り立つのって○○くらいなんだよね」

以前の自分を見ているようで恥ずかしい。

「お互い変わり者同士、悪くないと思うんだけど？」

おそらく彼女も近い将来、自分が特別な人間でなく、変わり者を演じていただけの凡人だと気付くだろう。

そして、俺は彼女と付き合い合った方が普通の恋愛ができると思う。

だけど、俺は彼女とは付き合わない。

「悪いけど、付き合い合っている人がいるんだ。それにお前とは恋人って肩書よりも、悪友って方がしっくりくる」

「確かにそうかもね。」

卒業前に気持ちいが伝えられて良かったわ」

そう言い残し、彼女は屋上から去って行く。



毅然とした態度を取っていたが、彼女の身体が震えていたのがわかった。

断る側は、優しくせず、期待させず、嫌われるぐらいの方が良い。

きっと彼女のことだ。

またすぐに新しい『愛』を見つかるだろう。



この選択が本当に正しいのかわからない。

選んだのなら、その選択肢が正しかったと証明することしかできないのだ。

あと半年で卒業する。

そして、また新しい生活が始まる。
人生はその繰り返しだ。

最近、ようやくフラット貞操帯を付けることができた。

これは今までの筒状の貞操帯と違い、陰茎を体内に押し込むのだ。

その分、これまで以上に管理されている実感が湧いてくる。



人によっては拷問にも感じるだろう。

俺も絶望にも似た惨めな感情を抱いたことだってある。

しかし、それすらも今では快楽に変わっている。

かつてサイズは平均以上で、ズル剥けで、亀頭の発育も良かった俺のペニス。今では見る影もなく、縮小している。

身体で使わない筋肉が退化するように、俺のチンポは役立たずである。

勃起しても芯に硬さがなく、ふにゃふにゃしているだけ。

その代わりに、皮は伸ばし続け、先端は黒く変色している。

今では剥いてもすぐに被ってしまうため、見栄剥きもできない雑魚チンポ。

清潔にしているつもりでも、包皮口の間から、腐ったチーズのような悪臭を放つ。



金玉も小さくなったが、逆に性欲は増し、
精液の量は増え、粘り気のある腐ったヨーグ
ルトのような精子が大量に出る。

粗チンをより強調するため、さらに身体を
鍛え、惨めさを演出する。

早く永久脱毛がしたい。

乳首も肥大化し、感度は良好で、垂れ下がる
ようになった。

アナル開発も順調で、メスイキも慣れたも
のだ。

最近ではアナルジュエリープラグにも興味
が出てきた。



あっという間に月日は流れ、俺は大○公進
学した。

生活が落ち着くまでは、いろいろとバタバ
タしていたが、先日ようやく俺はユミさんと
正式に付き合うことになった。

「本当に私でいいの？」

「もう俺はユミさん以外じゃダメな身体に
なっちゃいましたよ！」

「フッフ、それもそうだね♪
今の君を普通の女の子が見たら、ドン引き
だもんねWWW」

「ユ、ユミさんこそ、こんな俺なんかでいい
んですか？」

「君がいいじゃなくんで、君じゃないとダメ
なんだと思うっ♥

「それと今日からは『さん』付け禁止ね！」

昼間にデートをして、今まではそこで終わりだったが、今日からは違う。

実は今まででもテレビ通話などでエッチなことをしてきたが、会ってするのは初めてなのだ。

それはまだ高〇生だった自分への配慮だったのだろう。

だけど今日からは違う。
予約していた少し高めのホテルに到着。

「ねえ、君って本当に彼女いなかったの?」

「恥ずかしながら……告白はされたけど、付き合うのはユシが初めてだよ」

「ふん……これまで他の女の子とデートしたこともない?」

「友達と複数人で出かけたことはあるけど、デートはユシが初めてだよ」

「それについては、最初から女の子の扱い慣れ
てた感じがしたよね。」

最初のデート覚えてる？

私は緊張していたのに、君はスマートに立
ち回って、年上としての威厳がないんだけど」

「いやいや、俺だって、めっちゃくちゃ緊張し
てたからね！」

ネットや雑誌でデートの記事たくさん読ん
だし、ユミには内緒だったけど、デートコース
事前に二人で行ったりもしたし……」

「へ〜、そうだったんだ。」

今日もエスコート完璧だったから、彼女が
いないなんて信じられなかったんだよね」

「彼女もいたことないし……それに童貞だ
って前にも言ったよね」

「そうそう、そこ大事だよ」
君の童貞は私のモノ♡」

「じゃあ、服を全部脱いで」

ユミの口調が変わった。

これまで我慢していたものが溢れるように
最初から飛ばしてくる。

俺は部屋に入るとほぼ同時に服を全部脱が
されてしまった。



「すごい筋肉！ こんなキレイに割れた腹
筋初めて見たかも♪」

「寝てるからねー！」

「でも……フッフッ、この乳首やばいね♪
肥大化して垂れ下がってるじゃんWWW」

「フラット貞操帯でおちんちん、いないいな
いしちゃったねWWW

大人なのに、ツルツルのパイパンで恥ずか
しくないわけ?」

「恥ずかしいです……」



「だよねぇ〜!」

こんな人が彼氏だなんて、私、恥ずかしくて
友達に紹介できないもんWWW

あらあら、小さい金玉ちゃんがフルフル
震えているけど、怖くなっちゃった?

そんな金玉で精子作れるの?」

気付けば、ユミは水着のような下着姿になっていた。

頬を赤らめ、楽しそうに俺を責めてくる。

「いよいよ、今日から貞操帯の鍵も私が管理するからね♪」

君はもう二度と自由に射精することができない♪」



「もし、浮気したくなったら、自由にいつでもいいからね。」

まあ、そのチンポじゃ、浮気なんてできるわけないだろうけどねWWW」

「ぞ、そんなことか……」

「いやいや無理だってWWW
だって、そのチンポ、もう満足に勃起もで
きないんでしょ？」

インポチンポなんて役立たず、誰も必要と
しないからWWW」

乳首とアナル弄るセフしとかいらんじー！」



「いや、セックスくらいできるじー……」

できる……よな？

確かに勃起力は落ちたけど、それでも挿入
ぐらいはできる自信があった。

じゃないと、今後、ユミを満足させられない
し、子供だって作れないじゃないか……

「アムハッ、自分で気付いていないなんて可愛そうなんだなあ〜WWW

じゃあ、試してみるか?」

「だ、試すって……まさかっ!」

「セックスに決まってるじゃない?」

「い、いいの?」

てっきり、セックスはしばらくお預けだと思っていた。

「本当に童貞臭い反応するねWWW

年頃の男女なら別におかしいことじゃないでしょ?」



ユミは躊躇することなく、裸になる。

ユミの裸はもちろん、生の女性の裸を見るのは初めてだった。

「あ、あうう……」

「ちょっと変な声出さないでよぉ〜WWW

女性の裸ぐらい見慣れて……って君は童貞君だから、見るの初めてかWWW」

「……ううう」



恥ずかしがる様子を見せず、俺に自慢の身体を見せつけるように立つ。

発育が良く、ムッチリした男好みの身体。

俺とは違い、陰毛もしっかり生えそろうっている。



「これからもっとすごいことをするのに、裸程度でそんなに動揺しないですよWWW」

焦る俺とは違い、余裕が感じられた。

「……まさかとは思うけど、裸程度でイカないでよね」

その言葉がトリガーとなる。
必死にケツに力を入れて、我慢するが、身体
は反対に快楽を受け入れる。



「ええ〜、まさか本当に裸を見ただけでイッ
ちゃったの？」

オナニー覚えてたてのガキでも、もっと我慢
できると思うけど?」

「あっ、ごめっ!
ご、これは違……」

「何が違うのよ。
そのお漏らし射精が証拠でしょ?」

ズ
ヂャ
ヂャ
ヂャ!!



「うわあ〜、近くで見ると、本当にすごいね。
ちんちんぺったんこじゃんWWW」

「ちんちんが体内に入るなんて、人体はすごいよね〜。」
「普通はできないと思うよWWW」

「は、恥ずかしいよ……」

「マゾな君でも恥ずかしいんだ。
そいや、恥ずかしいよね。」

女の子に命令されて、貞操帯付けているなんて、普通の男じゃないもんWWW

「じゃあ、鍵外そうか……」



「ちよっさやだあ、なにこれWWW」

「久々に解放されたペニスは力なく、垂れ下がる。」

「昔見せてもらった、君のチンポってもっと大きかったよね？」

「貞操帯で、こんなに小さくなっちゃうんだ」

「それになんか皮伸びてない？
本体より皮の方が長いんじゃないの？」

「しかも先端の皮が黒く変色してるし、恥ずかしいチンポになっちゃったねWWW」

「フルフル震えてキモいんだけどWWW」

「この距離でもめっちゃくっちゃ臭いよWWW」

「童貞で包茎なんだから、せめて清潔感
保たないとWWW」

「なんか腐ったチーズの匂いがするWWW」

「ご、ごめんなさい……」

……嘘だ。

俺は恥ずかしがったり、謝ったりしている
が、本当はもっとユミにバカにされたい。

今日だって、わざと汚くして、自分でも気
なるぐらいの悪臭を放っている。

「こんな汚いチンポ入れたくないんだけど。
というか、このサイズに合うコンドームあ
るの?」

「ネ、ネットで特注に発注した極小サイズ
持っできているよ」

「特注WWW」

「まあ、笑い過ぎでお腹が痛いんだけど！」

「まあいいや、それじゃあ、早速セックスし
ようか。」

「もしかしたら、想像よりすごいかもしれない
しねWWW」



「フフフ、すごい真剣な顔。慌てなくても逃げないから、ゆっくりに大丈夫だよ。」

入れる場所がわからなかったら、お姉さんが教えてあげるから聞いてね。

君は童貞なんだから、全然恥ずかしいことじゃないからね♪」

「だ、大丈夫だってば……」

ネットで散々勉強してきた。イメージだって完璧だ。



「すぐに軽口が叩けないようにしてやる！」

「わおっ！」

強気なオラオラ系の君も素敵だね。

それじゃあ、早くしてくれない？

この体制、恥ずかしいんだよねWWW」

「わ、わかってるよ……」

あ、あれっ？

おかしいな……

「もぉ〜、さっきから入口にグリグリ擦りつけるだけで、焦らすなんて、意地悪だなぁ〜」



……入らない。
ユミは足を大きく開き、挿入しやすいよう
にしてくれている。
場所はわかるが、ユミのオマ○コにチンポ
が突破できない。

結果として入口でグリグリと擦り付ける
だけ……

理由は明白だ。
インポ気味で勃起しても芯まで硬くならず
グニャグニャのまま。

棒ではなく、紐を入れようとする感じ。
入るわけがない……

「ねぇ、どうしたの？
早く童貞卒業して、一緒に気持ち良くなろ
うよ♡」



最後の手段だ……
開発したアナルに指を入れる。

「あれ？ 少し硬くなってきた？」

「こゝこれからが本番だから……」
「その割には、もう厳しそうじゃない？」

アナル弄りは諸刃の剣だ。
多少、硬くはなるが、それ以上に快樂の方が
勝ってしまう。

「フツ……クククッ……アハハハッWWW」

「えっ？ ユ、ユジ、大丈夫？」

「おかしいのは君の方でしょうっ？」

「もぢぢ」

「どこの世界に彼女とセックスしようとして、アナルを弄る男がいるの？」

「ぜ、全部バレていた………
恥ずかしくて、情けない。」

「あゝ、笑いこらえるの大変だったよ。」

「深刻そうな顔したと思ったら、いきなりアナル弄り始めるんだもんWWW」

「もういい加減ギブアップしたろ？
挿入もできない雑魚インポチンポ君♪」

「ま、まだ……」

っぢっぢっぢっぢ

「ハッキリ言って時間の無駄。

このまま続けても、挿入する前に射精しちゃってより惨めになるだけだよ。

はい！ 童貞卒業失敗！」

「君は一生童貞のまま。

終身名誉童貞君決定！」

一生、私に管理されて生きていきなさい♡」

「だから言ったじゃん。」

君のチンポじゃ、セックスできないって」

「ごめん……彼氏なのに、役立たずで……」

「確かにチンポは役立たずだけど、彼氏と

しては満点だよ♡」

「な、なんぞ?」



「ハッキリ言つと、私って挿入されるセックス
スってあんまり好きじゃないんだよね。」

ぶっちゃけ気持ち良さなら、オナニーの方が
上だと思う。」

それにセックスが上手だって言う男って
なんか上から目線で好きになれないんだ」

「その点、君は童貞だから調子乗らないで
しょう？」

まあ、今のは少し調子に乗り始めた君への
お灸だと思ってよ」

「トシはセックスできなくてもいいの？」

「セックスって愛情表現の二つでしょ？」

「なら、別にセックスでなくても良くない？」

君はいつも私のことを考えてくれる。
私の考えを否定しないで、「一緒に楽しんで
くれる。」

私にはそっちの方が重要だよ♡」



「ユミは子供……赤ちゃん欲しくないの?」

「えっ? 赤ちゃん?」

ユミの表情が変わった。

しまった!
気が早すぎたか?

最近はお子さんを欲しがらない女性も増えてきていると聞いたことがある。

「赤ちゃんって……もしかして、君と私の?」

顔を真っ赤にしながら、頷いた。

考えてみれば、正式に付き合っただけだ。

それに俺はまだ大〇に入学したばかりの若造で、責任を果たせる力もない。

自分が情けなくなってしまう。

「君との赤ちゃん、めっちゃ欲しい♡」

男の子でも女の子でもどっちでも嬉しいけど、三人は欲しいかなあ〜♪

もしかして今の質問ってフロポーズ？
もう、私と結婚すること考えてくれたのかな？」



「ごめん……先走り過ぎた……
まだ、何の力もないのに……」

「二人で抱え込まないで、二人に悩もうよ♪」

それよりも、私との関係を真剣に考えてくれたことの方が嬉しいよ♡」

「そっかあ〜、君がそこまで私との関係を真剣に考えてくれていたとは……」

これは私も真剣に向き合わないと失礼だよねえ〜♪

今日はまだ早いかと思っただけど、念のため準備しておいて良かった」



ユミはフツフツと独り言のよつこ話し、自分のカバンを探る。

「覚悟してくれたんだよね？」

前に言ってくれたけど、私と一緒なら地獄でも堕ちてくれるんだよね？」

「もちろんですっ!」

「攻守交替ね♪」

私、入れるのは大好きなんだよね♡」

ユミが股間にディルドを装着した。

今から、俺はアレで犯されるのだ。

貞操帯も知らなかった自分が、当たり前のように見た瞬間に事実を受け入れていた。

たくましく、猛々しい、漆黒のディルド。

かつて、自分の股間にも同じようなペニスが備わっていた。

「痛かったら言ってね。」

言っても止めるとは約束しないけどWWW」



「あれれえ〜、抵抗もなく、すんなり入っっちゃったよ？」

「これはよほど、開発している証ですなあ〜」

「あぐっ！ おほっ！ イグッ！」

「感度も良好だね♡
少し動き早めるよ♪」

「はひっ！ ふほっ！ おほほっ！」

「下品な喘ぎ声いただきましたあ〜WWW
もっと汚い声聞かせて♡」

「ひぎっ！ ぶひょっ！

イグググッ！

あひい〜！ おぐっ！

もっぞもっぞ下さい〜！

おほほ♡

「おねだり上手だね♪
女の子みたいに後ろから責められて気持ち
いいんだ？」

本当に君は救いようのない変態だね♡

私、君のことカッコいいと思うよ。
顔も整っているし、筋トレして身体は引き
締まっている。

デートでは私のことを考えて、「生懸命リ
ードしてくれる。
……でもさ……」

「ダメダメッ！
それ以上は言わないで！」

カッコいいままでいさせて！
理想の彼氏でいさせてっ！」



「それがこんなド変態マツなんてビックリ
だよねWWW

さっきから一切抵抗しないで、アナル差し
出して、気付いてないかもしれないけど、私
の動きに連動させて、君もケツ振ってるよ♪」

「やダーッ！ カッコいい彼氏でいたいっ！」

「じゃあ、止める？」

「もうアナル握るの止めちゃう？」

「……………」

「黙っちゃうんだ。それじゃあ、止め……………」

「やダーッ！ 止めないで！」

「ド変態マツでいいから
アナル握るの止めないで！」

「もっともっとグチャグチャに犯して！」

「ケツ穴ほじくり回して！」

「君って中途半端に理性が残ってるんだよねえ〜♪」

「今後はその辺りを徹底的に潰してあげるから覚悟してね。」

「もう普通の男女関係には戻れないよ。周りから見たら、歪んだ関係。」

「地獄でもどこでも私と一緒になら堕ちてくれるんだもんね?」

「ユミ、大好きっ!」

「はいはい、知ってますよ。」

「そろそろイキたいでしょ?」

「ラストスパートかけるから、一緒に気持ち

良くなろうね♥」



落ち着いた後、ユミと一緒に風呂に入った
のだが……

「ちょっとやだあ〜WWW

包茎千んポの皮伸び過ぎい〜WWW

ゴムみたいにめっちゃくっちゃ伸びるじゃん」

「が、皮オナのし過ぎで……」

「アハハッ、だから先端が黒くなってるんだ。

本体よりも皮の方が長いじゃんWWW

これじゃあ、小〇生……いや、赤ちゃんにも

負けるでしょWWW

今度、銭湯で子供たちと千んポ勝負してき
なよ。

絶対負けるからWWW」

「ぞ、そんなに伸ばわなごらぬ……」

「いまさらWWW」

それにちゃんと伸ばさないと、キレイに洗えないじゃん！

チンカス臭いチンポも嫌いじゃないけど、貞操帯付けるんだから、清潔にしないと！」

「陰毛も永久脱毛して、淫紋タトゥーも面白いけど、淫語も面白そうだね。」

「生涯現役童貞」、「粗チン王」、「ユシ専用」とか良くないWWW」

フフフ、楽しみだねえ♡」

「あゝ、お風呂気持ち良かった」

ユミの満足そうな顔を見てホッとする。

俺は再びフラット貞操帯を付けられ、今日からは完全にユミが鍵を管理する。

「基本的には私が射精管理するけど、どうしてもキツイ時は連絡してね♪」

「あゝ、つばらくはアナル弄るの禁止。」

今日、結構激しくしたから、当分はケアを
してあげてね。

今度、アナルプラグ買いに行こうか？」

「ぞ、それなら、アナルジューエローはダメ？」



「あゝ、それいいじゃん！
お尻広げたらキレイなジュエリーがあるっ
てギャップ最高に可愛いねWWW

だとすれば、乳首もニップルピアスなんて
いいかもね。

ダルダルの乳首も少しはカッコ良くなるん
じゃないのWWW」



「だとすれば、いっそのこと、チンポの皮に
もピアス付けるのもアリか！

うわあゝ、すっごく楽しみ♡」

ユミはとても楽しそうだが、俺には二つだ
け心配事があった。

「あっ……ごめんね、私ばかり……
何か不安そうな顔しているけど、大丈夫？
どこか痛い？ 体調悪い？」

ユミはなんだかんだ言っつて、とても優しい。
本当に今すぐにも結婚したいぐらいだ。

だからこそ、ハッキリさせておかなくては
ならない。



「俺、一生童貞なことは覚悟できましたよ。」

托卵だったとしても、ユミの子なら愛せる
と思う……だけど、やっぱり俺はユミの子
供が欲しい」

「それで悩んでいたの？」

無言で頷いた。

「托卵って私が他の人とセックスするって
ことだよな？」

寝取られだっけ？

君はそういうの好き？」

「妄想としては受け入れられるけど、現実
だと辛い……」



「でも、もっつムシがいたいなら……」

「さっきも言ったけど、私は子供は二人欲し
いんだ」

「うん……でも、俺、役立たずチンポだから」

「私は「私と君の子供」が欲しいの！」

「お、俺もユミとの子供が欲しい！」

「なあ〜んだ、それで悩んでいたのか。」

深刻そうな顔していたから、心配して損じちゃった」

「でも現実問題として、挿入できないんだから……」



「童貞君には難しいお話だけど、妊娠するにはいろいろな方法があるんだよ。」

例えば体外受精。

精子バンクって聞いたことない？

必ずしも挿入しなくちゃいけないわけじゃないんだよ♪」

「絶対の保証はないけど、インポだって子供を作れるんだよ。」

それに君の精子は量だけは一人前だから
元気そうで子作りに向いてそうwww

と、言っわけで、少しは安心できた?」

「う、うん……ありがとう」



「だから、君が心配するのは「童貞のままパ
パになる」ことだねwww」

「あ……」

「貞操帯を止めれば、自然と勃起力が戻る
らしいけど、それは私が絶対に許さない。」

だから、「生童貞は確定♥」

「想像してみてください……」

息子と一緒にお風呂に入る時、ちんちんの大きさが負けちゃうのWWW

年頃になって、初体験を済ます息子に性体験が負けちゃうのWWW

恋愛相談を受けても「パパは童貞だからな」って正直に言わないとねWWW」



「年頃で生意気になった時に注意したら、童貞の癖に偉そうにすんなよ！」って口論で負けちゃうのWWW

「反論しようとしたら『そういう偉そうなのは童貞を卒業してから言ってくれ』ってコテンパンに負けちゃうんだよWWW」

「あゝ、君、想像して興奮してるでしょ？」

「そ、そんなひとは……」

「ウツウツ！」

金玉フルフル震えてるし、お尻モゾモゾ動いてるもん！」

「む、娘との関係を考えたら、興奮しちゃいました……」



「うわあゝ、変態！」

自分の娘に欲情しないでよ！」

「そ、それは絶対にしないよ！」

で、でも、ユミの小さい頃に似てるって考えたら……」

「はあゝ、君は本当に私が好きだな！」

仕方がないから、一生一緒にいてあげる♡」

「な、なんかフロポーズみたいだね」

「みたいじゃなくて、フロポーズ！」

君のようなド変態マゾ男を世の中に放流したら、大変なことになっちゃうよー！

育てた私が責任を持って面倒をみます！」

「お、俺、絶対にユヅキを幸せにするよ」



「だから、そういうのは二人で抱え込まないの！」

一緒に幸せになればいいでしょー！

今度の休みは結婚指輪を見に行くよ！

君の場合はアナルジュエリーだけどWWW

形があった方がお互い安心するでしょ？」

「トクと『愛』とは何かって話したの覚えてる?」

「覚えているに決まっていますよ!

あれがきっかけで、付き合うようになったんじゃない!」

「俺たちの関係って、周りからは歪な関係だけど、俺たちは幸せだよな」

「うん……」

「メリーバッドハンドみたいでオシッコでやない?」

「ん〜、そうかな?」

「お互いが依存し合って、愛し合う。それが俺たちの『愛』だと思います」



「う〜……」

あ、あれっ？ 違ったか？

「なんか、君にカッコ良く結論出されるのが
悔しい！」

二人の時は情けない君でいて欲しい！
もっともっと私に依存させる！」



「もうユズがいないと生きていけないわ」

「だから、そういうことをサラッと言うのが
ダメなの！」

もっと情けなく、懇願するように言っで！」

この後も楽しい口論は続き、俺たちは付き
合い、将来を約束した。

before

after

M男脳
開発、調教済

乳首開発済
・ニップルピアス

鍛えられた身体。
割れた腹筋。

平常時：8cm
勃起時16cm
ズル剥け

平常時：3cm
勃起不全
重度の仮性包茎
永久脱毛済
・貞操帯

アナル開発済



あれから月日は流れ、俺は社会人となった。

大〇を卒業して、すぐに籍を入れた。

歪な関係は変わらず……いや、むしろ悪化し、より強固なモノとなっている。

だけど、俺はとても幸せだ。

人の数だけ幸せがあるとは本当で、周りから見たら、俺は独占欲が強い彼女に拘束されているように見えるかもしれない。

だけど、実際はそんなことなく、逆に俺がユミを拘束しているのかもしれない。

お互いがお互いを必要とし、独立しながらも依存する関係。

それは俺にとってとても居心地が良く、周りと比べる必要がないほど、幸福を感じている。

最近お気に入りの尻コキプレイ。
相変わらず挿入はできないが、ユミのケツ
圧でチンポを圧迫し、射精する。

「ユ、ユミ！ さ、最高だよ！」

「君、これ好きだよね。」

「へっへっ腰振りして、みっともないwww」

「ムッムッムッムッ」

「好きっ！ 大好きっ！」

「あゝあゝ、こんな調子で父親になれるのか心配
なんだけど？」

「えっ？」

「……妊娠した」

「腰止まってるよ?」

「驚いた?」

「絶対に幸せにす……みんなで一緒に幸せになろうな!」

「フフフ、当たり前でしょ!」

「ユシ、本当にありがとう」

「君もありがとう」

「アムハッ、地獄に一緒に堕ちようって言うてたはずなのに、気付いたら天国だったよ」

「私……自分がこんな幸せな道を歩けるなんて想像してなかった」



「周りの普通と自分の普通が違うと気付いて、幸せになれないって思ってた」

「俺は逆にユミに本当の自分を教えてもらえたよ」

「……ほら、腰止まっている。」

早く、イケよ！

早漏インポ包茎役立たずチンポWWW」

ユミがお尻に力を入れ、チンポが握り潰される。

「あ、おほっ！」

「すごい間抜けな顔してるよWWW
とても父親になる男の顔には見えないね。」

ほら、イケッ！」

「本当に精液の量だけは二人前だよ。」

私、あと二人子供欲しいから、元気な精子作るの頑張ってるね♡」

「頑張る！ めっちゃくっちゃ金玉に精子作るように頑張る！」

「フッフ、期待しているからね♪」

君の人生も性欲も精子も全部私のモノ。だけど、逆に私のすべでも君のモノ！」

これからよろしくね。

パパ♡」



あわい

～あとがき～

このたびはご購入ありがとうございます。
プライベートなどでいろいろあり、新作を出せたことがとても嬉しいです。
正直、私自身、もう新作は出せないのでは？と思っていた時もありました。
やっぱり同人活動は楽しいですね。
ちなみに作中の体外受精は簡単に許可が下りないようなのでフィクションとして、お楽しみ下さい。
つたない部分や不満点もあるでしょうが、少しでも楽しんでいただけたなら幸いです。
最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

情けないちんちんを馬鹿にされたい 玄(くろ)